日本動物心理学会の動向：この10年間の大会発表からわかること

京都大学霊長類研究所 川合伸幸¹

Trends in Japanese Society for Animal Psychology: Analysis of annual meetings in this decade

NOBUYUKI KAWAI

Primate Research Institute, Kyoto University, Japan

「動物心理学研究」の記念すべき第50巻として特集が企画され、実現したことを嬉しく思う。専門誌としての「動物心理学研究」のここ数年の状況や展望については他に譲るとして (cf. 川合, 1997), 本稿では最近の日本動物心理学会の研究発表に焦点をあてて、学会発表の現状と展望について若干の意見を述べる。以下に、この10年間の動物心理学会での大会発表を、発表者の区分、所属機関、動物種、ごとに分類した。分類対象の対象となる研究者および機関は、すべて第一発表者とその所属機関のみとした。

まずFigure 1をみてもらいたい。これは、この10年間の大会発表件数をTenureとNon-tenureに分けて図示したものである。Tenureは、大学・研究所において年限なしの職を得ている研究者とした (以下、本文では常職研究者とする)。Non-tenureは、実際の年齢には関係なく、研究員や大学院生および日本学術振興会の特別研究員や年限付きの技官・助手などである (以下、本文では若手研究者とする)。もっとも目立つのは、大会発表件数が年々増加していることである。しかしその内訳をみると、常職研究者の発表件数はほぼ一定で21~33件の間を推移している。それに対して若手研究者の発表件数は増加し続け、この増加分が全体としての発表件数を引き上げている。現在の年次大会では若手研究者の発表の多さが目をひくが、私が日本動物心理学会に入会した10年前では若手研究者と常職研究の発表件数はほとんど変わらなかった。

1994年頃から若手研究者の発表が増加している。ちょうどこの年に「動物心理学研究」の編集委員長

に牧野現理事長が就任され、前年に続く1・2号の合併号が刊行されてそれまでの「遅れ」(刊行年と発行年が異なっていた)を取り戻した。翌年には編集委員が刷新され、理事長には関口前理事長が就任された。関口前理事長は、若手の話や研究発表をよく聞いて下さることもあり、懇親会にも学生が参加しやすい雰囲気になったように思う (懇親会参加者のデータがないのが残念である)。同時に、年次大会でも若手研究者の発表が増えて来た。

Figure 1. 1990-1999年における発表の分類—1—：研究者の区分による分類

1 別刷請求 e-mail: nkawai@pri.kyoto-u.ac.jp

Figure 2. 1990-1999年における発表の分類—2—: 被験体種による分類

Figure 2に被験体別の各年ごとの発表件数を示した。被験体は分類のレベルを無視し、慣例的に魚類、鳥類、齧歯類、霊長類、その他（理論、無脊椎動物、爬虫類、各種哺乳類）とした。「ネズミとハトの心理学」と揶揄される動物心理学だが実はそうではない。齧歯類の発表が圧倒的に多いが、鳥類の発表はほんの2割ほどでしかなく、むしろ霊長類の研究発表のほうが少し上回っている。鳥類の研究発表件数が霊長類より多かったのは、10年間で1度だけである。これらの傾向は四半世紀前とほぼ同じで、その頃には齧歯類の発表が全体の63%、霊長類が約13%、鳥類が約8%であった（南, 1975）。霊長類の行動・生理について研究を発表できる学会が他にあるにもかかわらず、それらが意外と多いのは、日本には先進諸国の中で唯一ヒト以外の霊長類が存在することと無縁でないだろう。野外観察の研究発表が少なくないことからわかる（鳥類の観察研究は2件）。

各年ごとの所属機関別の発表件数も分類した。分類方法は次の通りである。日本学術振興会の特別研究員の場合は受け入れ機関を所属先とした。また大学院生が別の大学・研究機関以外（民間の企業や病院）に就職し、新たな所属先の名前で元の所属機関の会員と連名で1度だけ発表した場合には、元の大学の所属とした。それ以外は発表時の所属機関にしたがって分類した。また、他県にある京都大学霊長類研究所を京都大学から分離した以外は、同じ大学の異なる学部や研究センターも1つの大学として分類した。その結果、この10年間で78の所属機関から発表があった。30件以上の発表があった上位9校をTable 1に載せた。筑波大学が圧倒的に多い。ついで慶應大学が目立つ。齧歯類の発表が多いのは、筑波・関西学院・同志社・早稲田と主にラット（マウス）を対象とする研究室の発表件数が多いことを反映しているのだろう。しかし、齧歯類の発表件数は増加しているわけではない。ちなみにこの10年間の「動物心理学研究」で論文が（展望・研究・資料のみを対象とし、総説・講演・意見は省略した）もっとも多いのは同志社大学の9編で、ついで筑波大学（5）、金沢大学・関西学院大学（4）・大阪市立大学・上智大学（3）と続く（関西大学・慶應義塾大学・東北大学・早稲田大学が各2編）。

以上のことから、年次大会での研究発表は増加傾向にあり、それは若手研究者の発表が増えてきたことによるといえる。また、「動物心理学研究」に掲載された論文をみても、若手研究者が第一著者になっていることが多い。しかし、総説・講演論文を書く若手研究者はほとんどいない（例外は1件）。これは日々、実験・観察を行っている若手研究者には原著論文など自らのデータに基づいた論文を書く傾向が強いからだと思われる。しかし今回の特集号のように、自らが研究している分野の最先端の研究をまとめ、その中で自分の研究の位置づけや方向性をはっきりさせた展望論文としてまとめられる若手研究者も、これだけ多く存在している。それは、昨年の第

Table 1. 所属機関別発表件数：1990-1999年の一部

研究機関	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	合計
筑波	9	10	5	8	12	12	12	14	13	12	107
慶應義塾	9	7	7	7	5	4	5	6	5	5	60
大阪	4	6	2	4	7	0	3	3	5	5	49
京大霊長研	2	3	3	2	1	3	4	4	6	2	40
関西学院	2	4	3	4	3	3	3	5	7	5	39
同志社	2	2	2	2	5	5	5	6	6	3	38
早稲田	3	3	3	2	4	6	3	2	4	6	36
北海道	3	4	4	4	8	3	2	2	1		31

58回大会の翌日に京都大学霊長類研究所で行われたサテライトシンポジウムの発表やフロアからの意見を聞いてもよくわかる(友永・田中, 1998)。大会での個々の研究発表も興味深いが、研究の背景や意味なども聞けたほうがより深く理解できる。しかし、若手研究者が講演する機会はずない。そこで、昨年行ったようなサテライトシンポジウムを若手研究者自身が毎年(隔年)行ってはどうだろうか。これまでも学会の前後や開催中にスポーツを行うことで、専門の異なる研究者間で交流を深める機会を設けてきた。そのときに、普段は接点がない研究者と交流できたことは良い機会であった。専門が異なる研究者の発表はなかなか聞かないものだが、じっくり聞けば理解できるし、また視点の違う考え方は斬新なアイデアを与えてくれる。小規模なものであれば、大会が終わった後に少しだけ教室の隅を借りて

でも(あるいは近所の喫茶店でも)行えるだろう。あるいは大会前日の夜でも可能だと思う。そのようなものを若手研究者が自主的に企画・運営していくことを期待している。現在の若手研究者の飛躍的な研究発表の増加をみれば不可能ではないだろう。

引用文献

- 川合伸幸 1997 最近の「動物心理学研究」について 動物心理学研究, 47, 49-51.
友永雅己・田中正之 1998 比較認知科学への展望—第58回大会サテライトシンポジウムを開催して— 動物心理学研究, 48, 245-247.
南 徹弘 1975 比較心理懇話会の活動状況 心理学評論, 18, 125-126.
(1999.10.1 受稿, 1999.10.29 受理)